「野生司香雪とサールナートの仏伝壁画展」（香川県）に行ってきました

宮原豊（9 組）

コロナ感染が終息しない中を、GoTo トラベルを利用して 8 月 31 日（月）～9 月 2 日（水）まで香川県を訪問しました。第一の目的は、9 月 1 日～6 日まで高松市で開催された「野生司香雪とサールナートの仏伝壁画展」で、その開会式と初日開催のフォーラムのお手伝いをすることでした。今回は短時日ながら昼夜をフル活用して四国在住の旧友数名に再会し、さらに前 2 回（25 年前、15 年前）の香川訪問の折に行けなかった琴平神社（金毘羅さん）と善通寺を参詣しました。

岡山駅で快速マリンライナーに乗り換えて瀬戸内海を渡ると坂出市ですが、四国の山は「ぼうや～よい子だ、ねんねしな」の昔ばなしの挿絵に出てるようなほっこりした丘です。そこからローカル線に乗り換えると金毘羅さんも善通寺も近いのですが、先ずは展覧会会場（高松市）に急ぎます。翌日開会を控えて準備中の香川県ミュージアムを訪れると展示場の壁を埋める「釈尊一代記」の原寸大の下図がインド・サールナートの初転法輪寺本堂を再現するかのようです。下図と言っても実際の壁画と同じように彩色を施した本格的なものです。

この下図は、足掛け 5 年の歳月を費やして壁画を完成させた野生司香雪が、昭和 11 年（1936 年）11 月 28 日に帰国した時にインドから携行したものです。その後昭和 15 年頃から香雪は長野・善光寺雲上殿（納骨堂）の壁画揮毫に携わっていたために東京大空襲での焼失を免れました。雲上殿からさほど遠くない曹洞宗昌禅寺の佐藤住職の仲立ちで福井県・大本山永平寺に献納された下図は丁寧に表装され保存されてきましたが、この永平寺で行われた表装に、若い頃に昌禅寺で修業されたこともあると言う長野県出身の南澤道人師が尽力されたそうです。幾重もの不思議な縁により永平寺に所蔵されている下図 24 面のうち、今回は 13 面が展示されましたが、これら下図を含めて 60 数点の作品を揃えて、このように大規模に展示されたのは今回が初めてだそうです。なお、南澤道人師はこの 9 月に大本山永平寺貫主に就任されました。

香川県出身の香雪は、善光寺雲上殿の壁画揮毫の仕事が終わった後も山ノ内町渋温泉に「不動山荘」を借りて、昭和 48 年（1973 年）に 88 歳の生涯を閉じるまで住み続けました。一方で、香雪は香川美術会発足（昭和 23 年）に参画し会員となり、また郷里に家族の墓を建てていますので、香川県との縁をなくしていたわけではないことが分かります。そもそも香雪という雅号に香川の一文字がありますが、インドでは自分の名を「ノース（北の日本から来た）香しい雪（ヒマラヤの雪をイメージ）」と説明していたそうです。長く冠雪す

る長野の山々に囲まれてインド・ヒマラヤを思いながら過ごしたかったのだろうと、香雪に縁ある香川の方が言われていましたが、そうかもしれないと納得させられました。

高松市での展覧会開会式とフォーラムではインド大使館の、ラージ・クマール・スリヴァスタヴァ首席公使が開会挨拶され、またヴィヴェーカナンダ文化センター（VCC）館長のシッダルト・シン博士（大使館広報部）がフォーラム講師としてスピーチされました。今回のイベントでは、香雪画伯を介して香川県とインドとの人的交流・文化交流に寄与するところが非常に大きかったと思います。日本にはインド由来の神様がたくさんおられます。例えば七福神の四神がインド由来ですが、金毘羅（コンピラ）もインド由来であることを知り、ここで縁が更に深まりました。クンピーラはガンジス川に住む鰐を神格化した神様で、ガンジス川を司る女神ガンガーの乗り物であるという説話があります。日本では金毘羅大権現は海上交通の守り神とされ、全国で港の見える山の上に神社が祀られてきました。

翌日、熱中症とコロナ・ウイルスに注意しながら長い石段を上り、25 年前からの念願であった琴平神社本殿を参詣できましたことは望外の喜びでした。また、弘法大師の生地である善通寺にまで足を伸ばすことができましたのも、案内いただいた友人のお陰です。翌日九州西部を襲った台風 9 号の影響で風雨が強くなる前に関東に戻りました。

（2020 年 9 月 10 日記）

最終準備中の展覧会場

開会式後のインド大使館首席公使と VCC 館長

琴平神社本殿に向かう石段

本殿から見た讃岐富士と四国の山々

船会社から奉納された絵馬